千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第7号　一～一〇（二〇一一）
研究論文

# 竹河巻における桐壺巻のなぞり

## ――光源氏と冷泉院の男皇子の対照――

髙野　浩

### 一　はじめに

竹河巻は、『源氏物語』中においてもとりわけ問題点を多く含む巻である。特に、その作者別人説が提起されたことは、他巻とは著しく異なった扱いを受けるにいたった主たる要因とも思しく、以降、特殊な位置づけで語られる巻となった。[1] この作者が別に存するという見方は、現在においても検討がなされている問題であり、依然として微妙な位置づけをこの巻は強いられている。だが、作者が別人であることを主張する論において、論拠はいくつか数え上げることができるが、それは必ずしも全面的に肯定できるものでもない。作者別人説を主張する武田宗俊氏は、その論拠として他巻を模倣している箇所の多さを指摘している。[2] たしかに、竹河巻には他巻のストーリー展開をなぞっているかのような箇所や他巻の場面との類似が認められる箇所が多い。しかし、それらが「模倣」と呼べるようなものなのかどうかは、今一度検討をする必要があるのではないだろうか。模倣とみなす要因は、現象として立ち現れた場面やストーリーの類似箇所について積極的な意味が見出しにくいと結論づけたからであろう。だが、類似する場面がそれ以前の巻々の中に存在するケースは『源氏物語』の中に限って見てみても数多く見られるし、それらのすべてが物語を大きく展開させるような原動力になっているわけではないだろう。そうした立場に立てば、類似場面の多さを別人の作の根拠の一つとして竹河巻を処理するのは、即断の感がある。むしろ、竹河巻が『源氏物語』の四十四番目の巻として数え上げられ、一続きのものとして読まれ続けてきたという過去をふまえ、まずは他の巻々と同列のものとして扱うべきであろう。そのうえで、今一度類似箇所の検討を行うなかで積極的な意味を見出していくことができるかどうかが重要なのではないかと考える。

本稿では、そうした考えに基づき、竹河巻にみられる他巻との類似箇所の検討を行い、その類似が作品の読みや解釈にいくばくかの影響力を有しているかどうかを検討する。今回、主として取り上げるのは桐壺巻との類似である。検討を進めていく中で、竹河巻の内容や背後に見え隠れする主題的な要素との関連についても言及していきたい。

### 二　竹河巻と桐壺巻の物語展開上の類似

竹河巻が桐壺巻の物語展開をふまえているとみられることについて

は、前述したとおり、早く武田宗俊氏が指摘をしている。

この巻の拙さはたゞに歌文のみでなく構想に於ても見られる。この巻には他の巻より材を借り来ったところ、模倣したと見るべきところが甚だ多い。少し強くいえば構想の各部分殆んど全部他の巻々の模倣ともいわれるのである。まず寡婦の玉鬘が夫の遺言に従って娘を院に奉り、その娘が寵を得て皇子を生み、他の后妃から嫉妬されて宮廷に居にくくなり退出して里がちとなることは、桐壺の巻の大納言の未亡人が夫の遺言に従って娘を帝に奉り、その娘が寵を得て皇子を産み、后妃の嫉妬をうけて里がちとなることと殆んど同じい。(3)

武田氏は、竹河巻に登場する玉鬘の娘大君が、冷泉院に参院し、皇子を出産、それがために他の后妃の妬みを買い、里がちになるという物語の展開は、桐壺巻にみられる桐壺更衣の入内、桐壺帝の寵愛と光源氏の出産が他の女御更衣らの嫉妬を引き起こし、やがて里がちになるという展開に類似していることを指摘する。武田氏は、竹河巻について作者別人説を唱え、この巻を低く評価する立場をとっていることもあり、この物語展開の類似は、竹河巻が桐壺巻を「模倣」したものだとみなしている。武田氏による竹河巻の評価はひとまずおくとしても、物語展開上、かなりの類似が桐壺巻と竹河巻の間にあることは確かであろう。

その後、この二つの巻の類似問題を検討しているのは、國枝久美子氏である。國枝氏は、武田氏の指摘を受けつつ、桐壺巻以外の他の巻との類似箇所も含めながら、竹河巻の在り方を考察している。その中で、桐壺巻に類似する展開については、それがよく似通っていることを認めたうえで、その展開の終末部、結末の部分に違いが見受けられるとする。

A―1〈竹河〉鬚黒が大君の今上帝後宮入内を遺言していた。
〈桐壺〉按察使大納言が、桐壺更衣の桐壺帝後宮入内を遺言していた。未亡人である母北の方はそれを果たす。

A―2〈竹河〉大君は、冷泉院後宮に入り、寵厚く、御子達を生むが、方々に憎まれ、里がちである。
〈桐壺〉更衣は、桐壺帝後宮に入り、寵厚く、源氏を生んだが、方々に憎まれ、里がちであり、病重くなり、亡くなる。

B　〈竹河〉冷泉院は、玉鬘を忘れられず、大君を参院させる。院は後宮内を猶子である薫を連れて歩き、大君のもとで遊びなどをし、薫は大君を慕うが、さほど理性を失うほどではない。
〈桐壺・若紫他〉桐壺帝は、更衣の面影を求めて藤壺を入内させる。帝は後宮内を愛児源氏を連れて歩き、藤壺のもとで遊びなどをし、現時は藤壺を慕ってゆくが、己れの気持ちを圧さえきれず、藤壺と密通するに至る。(4)

國枝氏の分類に従えば、「A―1」として、娘を入内させたいとする父の遺言や遺志が存在すること、「A―2」として、参院・入内後に寵を得て皇子を出産するも、周囲の反感を買い里がちになることが共通し、類似する点だということになる。また、「B」として、それぞれの参院・入内の背景には忘れえぬ女性の存在があること、院あるいは帝から寵を受ける猶子もしくは実子の秘められた恋心が描かれることが共通している。

桐壺巻にかなりよく似通った展開が竹河巻内にあることがうかがえるが、こうした共通する要素の末尾の部分には違いがみられることを國枝氏は指摘している。すなわち、「A―1」では、入内の実現・非実現、「A―2」では、参院・入内を果たした女性の末路、「B」では

秘すべき恋の展開の有無である。この点について國枝氏は、総じて引用側の竹河巻の内容が、物語の展開という観点からすると発展性に乏しく、閉じられたかたちになっていると見なしている。

國枝氏の検討をふまえたかたちで竹河巻と桐壺巻の類似箇所の検討を行っているのが星山健氏である。[5] 星山氏は、國枝氏の検討内容を評価したうえで、両巻には対応する構図が見てとれるとする。すなわち、竹河巻における「冷泉院・玉鬘大君・薫」という構図は、「桐壺帝・藤壺・光源氏」という桐壺巻の人物の関係構図に重なるもので、桐壺巻からの影響を指摘している。その意図するところとしては、藤壺と光源氏の密通事件を想起させつつ、玉鬘大君と蔵人少将や薫の関係の進展をにおわせるような役割があるのだとする。[6] また、玉鬘大君は桐壺更衣のイメージをふまえているのだともいう。

ここまで、竹河巻にみられる桐壺巻との類似箇所の問題について、三氏の検討内容を示してきた。各氏が指摘するように、竹河巻の中には桐壺巻に酷似する箇所が包含されていることは疑いのないところであろう。そして、それらは玉鬘大君と冷泉院の婚姻に絡む物語展開において類似性を見せているということも明らかである。

ただし、諸氏の指摘は、薫や玉鬘大君を軸とするものとなっている。たしかに、竹河巻の中におけるヒロインとしては玉鬘大君をおいてほかには考えにくいものがあるし、また竹河巻以降に展開する宇治の物語を視野に入れるとき、薫の存在は無視しづらいものがある。しかし、竹河巻が匂兵部卿・紅梅の二巻とあわせて、しばしば匂宮三帖という括りで捉えられることがあることを思うと、竹河巻の内部、あるいは宇治十帖への眼差しのみで捉えていく以外の視点についても検討すべきなのではないかと思われる。次節では、この匂宮三帖という枠組みを意識したかたちで、この類似問題に切り込んでみたい。

## 三、家の再生物語

匂宮三帖は、「橋掛かり三帖」とも呼ばれ、従来、幻巻までの正編（三部構成説にのっとるならば、第一部と第二部）から宇治十帖の物語へと移行するための巻々だと見なされてきた。光源氏死後の物語世界を後日譚の体裁で描き、宇治十帖の物語を導き出すための、いわば序にあたる役割を担っているということである。だが、近年では、単なる序としてのみ補入されているのではなく、より積極的にこの三帖の有する意味を掬い取っていく方向性での検討がなされている。[7] 具体的には、幻巻で正編が一段落つくのではなく、正編の閉じ目の役割を匂宮三帖が担っているという見方である。もちろん宇治十帖への展開を見据える序的な役割をこの三帖（特に匂兵部卿巻）が請け負っていることはたしかではあるが、正編の物語の真の終焉はこの三帖にあるとする視点は、『源氏物語』の構造を捉えていく意味において重要な問題提起であったと言えるだろう。その匂宮三帖の中に正編の閉じ目としての性格が内包されているという考え方は、すなわち光源氏という人物の終焉を描く巻々としての意味を見出すものであった。つまり光源氏を中心に据えて匂宮三帖を捉えていくということである。この考え方は、本稿で取り上げる竹河巻に見られる桐壺巻のなぞりの問題においても重要な視点だと考える。以下、この点に重きを置きながら検討を進めていく。

竹河巻がなぞっている桐壺巻所収の一連の流れは、それ自体を取り上げるならば、桐壺帝と桐壺更衣の悲恋の物語ということになるのであろうが、その一方で、それは主人公光源氏誕生にかかわる前史でもある。この点に鑑み、光源氏を軸に据え、問題を検討していく余地は十分にあろう。そのとき、竹河巻に見られる桐壺巻に類似した箇所は、単に物語の展開・流れをなぞっているのではなく、光源氏誕生にまつわる物語をなぞっているのだとみなすことが可能であろう。

光源氏が誕生することになった経緯の発端は、桐壺更衣が桐壺帝のもとに入内するところにあるわけだが、そこには更衣の父である故大納言の遺志・遺言が大きく介在している。

「（前略）生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、ただ、『この人の宮仕の本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすがへす諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だし立てはべりしを、身にあまるまでの御心ざしのよろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつまじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」と言ひもやらずむせかへりたまふほどに夜も更けぬ。

（①桐壺、三〇～三一）[8]

引用したのは桐壺更衣の母の述懐部分である。ここで更衣の母は、娘の入内に際し、夫である故大納言の意向に従ったことを述べている。この点について、日向一雅氏は、「家の再生」という観点から検討している。[9]

日向氏によれば、自身の死後は家の没落が予見される状況下にあって大納言の遺言は、「現実的な権勢の獲得を目的としていたというよりも、家の没落が自明の境遇において、すぐれて情念的な遺志の発現であった」とし、その意図するところを「外戚としての繁栄がありえないことを承知のうえで大納言が更衣の入内を完遂させたことは、かれの家が皇統にくいこみ源氏として再生する途にかけた」ものであったとしている。男子による家の「存続・復興」ではなく、女子を媒介とした「家の再生」という方策がとられたとし、これは故大納言や明石入道のとった方策であることから、この一門の独自な家再生の論理と指摘する。そして、これは光源氏の生涯を貫く基軸であったともいう。つまり、光源氏の物語において、こうした誕生の契機は重要な問題として存在し、没落・退廃していく家の再生とその後の繁栄は光源氏の人生の命題（もちろん光源氏本人はそのことに無頓着であったかもしれないが）であったのだともいえるだろう。こうしたことから、竹河巻における桐壺巻のなぞりの問題を捉えていく際、土台として用いられた桐壺巻の各箇所の有する意味を光源氏の問題として位置づけ、ふまえていくことは大切だと思われる。

ところで、こうした光源氏の登場あるいは誕生にかかわるいきさつに酷似する人物が竹河巻に存在することには注意すべきだろう。冷泉院と玉鬘大君の間に生まれる男皇子である。両者がよく似通った位置づけで捉えられることは、前述した竹河・桐壺両巻の類似点を指摘する諸氏の見解にも見えるように、玉鬘大君の参院後の人生が桐壺更衣の人生をなぞらえていることからも明らかであろう。ここで重要だと思われるのは、竹河巻の冒頭には鬚黒・玉鬘の家の没落があらかじめ予見されるような記事がさしはさまれていることである。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。

（⑤竹河・五九）

引用箇所は竹河巻の冒頭箇所である。竹河巻は、家の没落・退廃と

いう地盤のもとに描かれるのだということが明瞭に示されている。また、そもそも匂宮三帖そのものが、六条院家、紅梅大納言家、故鬚黒・玉鬘家といった各家の物語という体裁で形作られていることをふまえても、「家」が一つの大きなテーマとして取り上げられていることは間違いないだろう。中でも竹河巻については、それが家の没落・退廃という問題を含みこんでいる点において、先に見た明石大納言家をめぐる「家の再生」のテーマとの接点を含みこんでいるとみなせるだろう。そうしたなかで、冷泉院と玉鬘大君の間に生まれた男皇子が光源氏とよく似通った形で誕生することには何らかの意味を見出すことは可能なのではないだろうか。

この冷泉院の皇子は次のような経緯で誕生している。「内裏にも、かならず宮仕の本意深きよしを大臣の奏しおきたまひければ」（⑤竹河、六一）とあるように、鬚黒はもともと玉鬘大君を今上帝に入内させる心づもりでいた。鬚黒の入内に対する意図は、外戚となり、家の発展を企図したものであっただろう。その点において、皇族あるいは源氏としての家再生を企図した故大納言の考えとは異なっている。もっとも、光源氏にも立坊の可能性が皆無であったわけではないことから、鬚黒と同様の考えを故大納言がまったく持っていなかったと断定するわけにはいかないだろう。ただし、死に際してもなお、入内を望んだという点からは、最終的には故大納言の意向は鬚黒とは大きく異なったものになっていたということなのだろう。そして、桐壺更衣の母は故大納言の意向をくみ、忠実に実行に移した。それに対して、竹河巻においては、玉鬘は思案の結果、鬚黒の遺志を反故にして、自らの個人的な意向で冷泉院に娘大君を嫁がせてしまう。そして、冷泉院と大君の間に男皇子が誕生することとなった。

桐壺巻の光源氏誕生をめぐる一連の物語展開と、冷泉院の男皇子誕生をめぐる物語展開は、よく似通っているものの、故人の遺志の中に、既存の家を解体し、「家の再生」というかたちをとってでも繁栄を目指すという思念が存在したかどうかの点において違いがある。鬚黒の意向が、玉鬘の判断で反故にされてしまうことは、鬚黒が故大納言と同様の思念を持ち得なかったがゆえのものであろう。鬚黒がそうした思念を持たない以上、玉鬘も鬚黒同様、家の繁栄を「再生」ではなく「再興・復興」というかたちでしか考えられなかったのであろう。そしてこのことが、冷泉院に大君を参院させるという玉鬘の選択を可能にしている。

光源氏と冷泉院の男皇子の間には、よく似通っていながらも微妙な差異が誕生経緯に生じている。光源氏にかけられていたような重い課題、すなわち「家の再生」という故人の遺志が冷泉院の男皇子の背後には存在しないのである。

こうした違いの問題は、二人の誕生後の様子にも波及している。光源氏は、その誕生後、栄えある未来が予見されるような輝かしさを伴って描かれる。それに対して、冷泉院の皇子は、その将来性の乏しさが誕生直後に描かれることになる。

年ごろありて、また男御子を産みたまひつ。そこらさぶらひたまふ御方々にかかることなくて年ごろになりにけるを、おろかならざりける御宿世など世人おどろく。帝は、まして限りなくめづらしと、この今宮をば思ひきこえたまへり。おりゐたまはぬ世ならましかば、いかにかひあらまし、今は何ごともはえなき世と、いと口惜しとなん思しける。

（⑤竹河・一〇四～一〇五）

「おりゐたまはぬ世ならましかば、いかにかひあらまし、今は何ごともはえなき世と、いと口惜しとなん思しける」とあるように、冷泉院の思いを経由して、男皇子の将来性の乏しさが明るみになる。この男皇子の存在は、鬚黒・玉鬘家にとって、当然のことではあるが家の再生という役割を果たすわけでもなく、また発展や栄華に向けての再

出発を担う人物でもないことは明らかである。それは冷泉院の権力の問題とも絡む。退位後の冷泉院が、院政のように力を保持しえなくなっていることは、その後の宇治十帖での取り上げられ方からもうかがえるものだ。冷泉院は、橋姫巻で薫と八宮を引き合わせる役割を担いはするものの、その後の物語には姿を現さない。政治向きの事柄はもっぱら今上帝や明石中宮の意向が示されるのみであることからも、冷泉院は退位した帝という立場以上の力は持ち得ていないのであろう。だとするならば、冷泉院の男皇子も光源氏的な飛躍は想像しえないということは十分推測が可能なはずである。構図的にはよく似ていながらも、この男皇子には光源氏のような人生は用意されてはいないのだ。それはひとえに、家再生の遺志を託されていないことに端を発するものだったのである。

このことは、光源氏がいかに稀有で一回的な性質を伴った人物であったかを再認識させるものでもあろう。この桐壺巻の光源氏によく似せられた冷泉院の皇子誕生の物語は、光源氏の特異性を浮き彫りにするものだったのだと考えられる。

## 四　竹河巻の構造との関連

前節まで、竹河巻における桐壺巻のなぞりの問題を取り上げ、その意味について検討してきた。特に、竹河巻にみられる冷泉院の皇子の誕生について光源氏の誕生経緯との関連性について指摘し、冷泉院の皇子が光源氏とよく似通ったかたちで登場しながらも、光源氏とは異なって、その誕生にかかわり「家の再生」という課題を担わされてはいないことを述べた。そして、この点が桐壺巻のなぞりの意味するところだと考えられるとした。このよく似通った両者の差異に目を向けることで、光源氏の特異性・超越性が光源氏死後の世界を描く竹河巻に至って再確認できるように形作られているとみられる。その点からすれば、光源氏は冷泉院の皇子と対照されながら賛美されているように見える。だが、はたしてその賛美は全面的なものなのか、あるいは光源氏の賛美がこの巻の意図するところの一つであるかどうかの判断については慎重を要する。というのも、前稿、前々稿で検討したところでは、竹河巻の進行過程と光源氏賛美は関連があると思われるからだ。[10] 竹河巻が進行していくに従い、光源氏の権威や超越性はもはや力を持ち得なくなっていくさまが見て取れるのだ。詳細についてはそれぞれの稿を参照していただくとして、ここでは、前稿、前々稿において述べたところの概要を以下に示すのみとする。

検討材料としてまず取り上げたのは、竹河巻の序文の中に見られる「離れたまへりし」という表現である。この表現は、親疎関係を問題にするものとして捉えるべきもので、その立場に立つとき問題になるのは、玉鬘家はいつ六条院家と疎遠になったのかということである。それはまさに竹河巻の内部で進行していくものであったということを私見として提起した。具体的には、夕霧の玉鬘方への対応が変化していく中に、両者の類縁関係の破綻が浮かび上がってくる。「この院荒らさず、ほとりの大路など人影離れはつまじう」（⑤匂兵部卿・二〇）と、光源氏の遺志に沿おうとするあり方を当初は示すものの、そこから徐々に逸脱していく。匂兵部卿巻や竹河巻の前半でみられた、光源氏の遺志を尊重し、玉鬘を厚遇しようとする夕霧の姿は、竹河巻末に向かうにしたがい見られなくなるのである。そして、最終的に玉鬘家は夕霧によって切り捨てられ、没落へと向かうことになったのであった。六条院家と玉鬘家の関係崩壊こそが、竹河巻において悪御達によって語られた物語であったとみられる。悪御達の語りは、光源氏亡き後、その不在を追懐しつつも、実際のところは玉鬘方の視線によって明るみにされる六条院家の享楽的な暮らしぶりや、光源氏の遺言としての玉鬘厚遇を果たさぬ夕霧の姿を露わに映し出す。このことは、光源氏を尊重しようとした夕霧をして光源氏の遺志が今や効力を持たな

いことをも明確に示してしまっている。匂兵部卿巻に見られた夕霧の光源氏尊重の念とそのありようは、竹河巻において真相をあぶりだされてしまったということになる。そうした事柄をより明瞭に示す役割が竹河巻の序文にあった「ひが事」という一語である。「紫のゆかり」の語りにみられる匂兵部卿巻の夕霧は、光源氏の遺志を引き継ぎ、縁故者を後見・庇護したとされていたが、実際のところは玉鬘の切り捨てを行い、光源氏の遺志に背いている、ということを述べるのが悪御達の主目的だったのではないかと考えた。つまり、悪御達の語りとは、光源氏尊重の念がどれほどのものであったのかということを明らかにする、いわば異議申し立て・疑義を中心とするものであったのだろう。そして、このことは、光源氏の遺志が形骸化していることを浮き彫りにし、その影響力の永遠性の否定、終焉までをも語っているのだとみられる。

以上がこれまでに検討してきた内容である。この流れに沿うならば、光源氏賛美のありようについては、竹河巻の物語の推移とあわせて検討する必要があるだろう。

冷泉院の男皇子の誕生は巻の後半部に見られるが、この皇子の誕生後、玉鬘家に対する周囲の風当たりは本格的に強まっている。誕生記事の直後に、

女一の宮を限りなきものに思ひきこえたまひしを、かくさまざまにうつくしくて数そひたまへれば、めづらかなる方にて、いとことに思いたるをなん、女御も、あまりかうてはものしからむと御心動きける。事にふれて安からずくねくねしきこと出で来などして、おのづから御仲も隔たるべかめり。世のこととして、数ならぬ人の仲らひにも、もとよりことわりえたる方にこそ、あいなきおほよその人も心を寄するわざなめれば、院の内の上下の人々、いとやむごとなくて久しくなりたまへる御方にのみことわりて、はかないことにも、この御方ざまをよからずとりなしなどするを、御せうとの君たちも、「さればよ。あしうやは聞こえおきける」といとど申したまふ。心やすからず、聞き苦しきままに、「かからで、のどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし。限りなき幸ひなくて、宮仕の筋は思ひよるまじきわざなりけり」と、大上は嘆きたまふ。

（⑤竹河・一〇四～一〇五）

と描かれ、玉鬘家の苦境が顕在化していく。さらに、しばらく後の記述から巻末にかけても昇進に関する話題が出てくるが、「よろこびしたまへる人々、この御族（六条院家・紅梅大納言家）より外に人なきころほひになんありける」（⑤竹河・一〇七）と二家ばかりが栄進し、「右兵衛督、右大弁にて、みな非参議なるを愁はしと思へり。侍従と聞こゆめりしぞ、このころ頭中将と聞こゆめる。年齢のほどはかたはならねど、人に後ると嘆きたまへり」（⑤竹河・一一三）と、玉鬘家の息子たちはことごとく六条院家や紅梅大納言家に差をつけられてしまったという。玉鬘家の没落・退廃が予見される内容であるが、このことは玉鬘の苦境として描かれている。光源氏の遺志とは異なる方向性で玉鬘の後半生・晩年は動いていくことになるのであろう。

六条院には、すべて、なほ、昔に変らず数まへきこえたまひて、亡せたまひなむ後のことども書きおきたまへる御処分の文どもにも、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心ありて、さるべきをりをり訪れきこえたまふ。

（竹河、六〇）

引用した箇所内に見受けられる光源氏の遺志は、鬚黒と結婚してもなお一族の範疇に玉鬘を位置づけるものであったとみえ、夕霧もそれに準じた対応を当初はとっていたとされる。しかし、昇進の記事にお

いては、明らかな差をつけられており、もはや一族の範疇には据え置かれていないことは明らかである。このようにして、光源氏の遺志は顧みられることがなくなっていき、忘れ去られていく。このことは、光源氏の意向はもはや力を持ち得なくなっているということを示していよう。表面的には賛美の対象として語られているようでいて、実のところ光源氏は過去の存在であることを決定づけられ、物語から退場することを強いられている。その意味で、光源氏の時代は終焉を迎えているのではないか。

ここに、桐壺巻のなぞり、すなわち光源氏と冷泉院の男皇子の問題はどのように関わるのであろうか。冷泉院の男皇子と光源氏の対照は、光源氏の人生の一回的な性質を浮かび上がらせ、その点においては稀有で超越的なものであったことを想起させもする。だが、結局は前述のごとく、光源氏はいかに賛美されようとも、竹河巻が進行する中で、その権威性は引き失われていってしまうのである。この男皇子との対照は、光源氏の特異性を示すものではあるものの、巻全体の中においては、光源氏が絶対的な存在であり続けることを許容しない語りの中に引き合いに出されつつ、最後は回収されてしまうものであった。

## 五　まとめ

ここまで、竹河巻において桐壺巻のなぞりが見られる箇所について検討してきた。その際、匂宮三帖という枠組みの中でこの問題をとらえ返した。この一連の巻々は、宇治十帖への架け橋としてのみ機能しているのではなく、正編の物語内容の結末部、閉じ目としての役割をも担っているからである。そうした性質を持った巻として竹河巻をとらえるとき、桐壺巻のなぞりの場面も、正編の物語を閉じるはたらきを担っているのだと考えることが可能であろう。具体的には、光源氏の権威や理想性、一回性の問題が、桐壺巻の光源氏と竹河巻の冷泉院男皇子の誕生の対照を要求しながら現出してくることになる。しかし、それは単に光源氏という稀有な存在を強調することのみで終息するのではない。竹河巻の物語全体を通して示される玉鬘家の退廃という問題に目を向ければ、光源氏は賛美されながらも、玉鬘家の衰退と機を一にしながら、同時進行的にその権威は形骸化し、忘れ去られていく。過去の稀なる現象、一回性の強い人生、再現不可能な存在として光源氏は描かれるものの、結局はこの世を去った後には絶対的存在として残りえないことが確認されているのだと考えられる。そうした意味では、桐壺巻のなぞりは、光源氏が稀有な存在であることを一度は示しつつ、その権威と絶対性の問題を俎上に乗せる役割を担っていたとみられる。

最後に、光源氏の位置づけが、その死後において過去の存在へと移行していくことについて、宇治十帖の中にもそれを示唆すると思しき箇所が存することを述べておきたい。次に引く宿木巻の一節である。

「故院の亡せたまひて後、二三年ばかりの末に、世を背きたまひし嵯峨院にも、六条院にも、さしのぞく人の心をさめん方なくなんはべりける。木草の色につけても、涙にくれてのみなん帰りはべりける。かの御あたりの人は、上下心浅き人なくこそはべりけれ、方々集ひものせられける人々も、みな所どころあかれ散りつつ、おのおの思ひ離るる住まひをしたまふめりしに、はかなきほどの女房などは、まして心をさめん方なくおぼえけるままに、ものおぼえぬ心に任せつつ山、林に入りまじり、すずろなる田舎人になりなど、あはれにまどひ散るこそ多くはべりけれ。さて、なかなかみな荒らしはて、忘れ草生ほして後なん、この右大臣も渡り住み、宮たちなども方々ものしたまへば、昔に返りたるやうにはべめる。」

（⑥宿木・三九五～三九六）

この箇所は、夕霧の娘六の君と匂宮の結婚がおし進められていく中、悲嘆にくれ、宇治を恋う中君に対して薫がかけた言葉である。この中で薫は六条院の荒廃に言及している。六条院の荒廃は、それ以前の巻々には見えない内容だ。この箇所について、玉上卓彌氏は「六条の院を維持経営する力が夕霧になかったと見るべきであろう」とする。[11] たしかに夕霧がこの段階で光源氏並みの力を持ち得ていたとは考えにくいこともあり、その可能性は否めない。だが、薫の言に従えば、相当に荒廃が進んだ後に夕霧が移り住み、ようやく再興されたことになる。この荒廃が進む期間の長さはわからないものの、ある程度の時間の経過があったのではないかとみられる。夕霧が光源氏並みの力を持ちえなかったとしても、ここまで荒廃を進めてしまうということは考えうるのであろうか。いかような理由があるのかは定めがたいところではあるのだが、かつて光源氏の権力の象徴としてあった六条院は、もはやその主を光源氏と人々が見なし得なくなりつつあることが浮き彫りになっている箇所だと言えるのではないか。少なくとも、光源氏の余慶をもって六条院が存続しているのではないことは確かだ。その意味で、光源氏は過去の存在に帰してしまっている。[12]

この箇所にはさらなる問題も潜んでいる。前に引用した箇所であるが、匂兵部卿巻において、夕霧は「この院荒らさず、ほとりの大路など、人影離れ果つまじう」と述べていた。明らかに薫の語ったところとの間に矛盾が存するのである。このことは、竹河巻の捉え方にも影響を及ぼす余地がある。匂兵部卿巻の内容に対して、竹河巻の語り手である悪御達はしばしば信憑性のない語りだとみなされるが、この箇所の存在は、その捉え方について再考を要することを迫る。匂兵部卿巻で語られた内容が、必ずしも正しい見解であるとはみなせなくなるのである。その点において、悪御達の語りの信憑性の判断については、慎重な態度をとらねばならないということを付言しておく。こうした問題とあわせ、竹河巻における桐壺巻以外の巻との類似点については、機をあらため検討したい。

**注**

(1) 表現、内容をはじめとした多くの点で問題をはらむ巻として認識され、また作者別人説が提起されたこともあり、他巻に比して低い評価がなされてきた。この巻に関する研究史については、池田一臣「匂宮・紅梅・竹河三帖の成立」(『講座　源氏物語の世界』七・有斐閣・昭和五七年)や、竹河巻研究史を概括した、星山健「「竹河」巻論序説――語り手「悪御達」による物語取りとその意図」(『新物語研究』四・若草書房・平成八年)などが詳しい。

(2) 武田宗俊「「竹河の巻」に就いて――その紫式部の作であり得ないことに就いて――」(『源氏物語の研究』岩波書店・昭和二九年)。作者別人説については、その真偽が定めがたいところがある。現時点では態度を保留にしつつ、『源氏物語』の中の一帖として、現行の巻序で読まれてきたことを重視し、単に四十四番目の巻としてとらえていく。

(3) 前掲注(2)武田氏論文参照。

(4) 國枝久美子「「竹河」巻の筋立てと描写――他の巻々との類似性について――」(『国文鶴見』一九・昭和五九年)

(5) 前掲注(1)星山氏論文参照。

(6) 星山氏は、玉鬘大君と蔵人少将や薫の不義密通を予見させながら、それが実際には実現されないことで、間接的に冷泉院や薫の出生の秘密も存在しない、つまり「紫のゆかり」の語りは「ひが事」だと悪御達は語ろうとしているのだとする。だが、竹河巻では密通が起こらないことを理由に、正編の二つの密通事件も捏造されたものと主張していると解せるかどうかには疑問が残る。

(7) 陣野英則「「光源氏の物語」としての匂宮三帖」(『学術研究』四七・早稲田大学教育学部・平成一一年)参照。

(8) 『源氏物語』本文の引用は、小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』に拠

った。なお、引用する際には、末尾に巻数・巻名・掲載ページ数を括弧付きで付す。

(9) 日向一雅「光源氏論への一視点――「家」の遺志と王権と――」(『源氏物語の主題　家の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社・昭和五八年)、「桐壺帝と桐壺更衣――親政の理想と「家」の遺志、そして「長恨」の主題――」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂・平成一一年)参照。

(10) 拙稿「『源氏物語』竹河巻冒頭表現考――切り捨てられる玉鬘一家と形骸化する光源氏の遺志――」(『千葉経済大学短期大学部紀要』五・平成二一年)、「「落ちとまり残れる」悪御達――「『源氏物語』竹河巻冒頭表現考」補遺――」(『千葉経済大学短期大学部紀要』六・平成二二年)。

(11) 玉上琢彌『源氏物語評釈』一一(角川書店・昭和四三年)

(12) 池田節子「光源氏は、どのように、第三部に登場しているか」『源氏物語の解釈と鑑賞　宿木(前半)』(至文堂・平成一七年)では、「六条院が一度荒廃してから復活したということは、六条院の死と再生を意味するものであろう。「宿木」巻は久々に舞台が都に戻った巻であるが、都の世界が源氏色を払拭して、新しい時代になったということが、この言及によって示されているといえよう。だが、『源氏物語』は、正編を超えて新しく展開していくかというと、そうはならない。「宿木」巻は、中の君の煩悶が紫の上のそれに酷似するなど、正編の二番煎じと思われる箇所が少なくない。やがて突然浮舟が登場して、舞台は再び宇治に移る。物語が沈滞していることと、光源氏への言及が多いことは無関係ではないのではないか。光源氏の時代は過ぎ去ったとして、光源氏を越えようとするが越えられない。つまり都では、正編の物語と光源氏の存在が大きすぎて、物語が有効に展開していかないように思われる。」としている。